

入つてくる、あの明るい陽光ではない。

中世のあかりはひかえめな光である。自然のままの優しい光である。ものを見たり、夜の町を照らすのに適しているとはいひ難く、近代的な便利といふことからほど遠い。しかし、この、ほのかな光

から、中世の人々は深遠な光の哲学を積み上げ、光の入り口である窓を飾ることで、ガラスの芸術を創造したのである。

(日本女子体育大学)

た  
き  
火

豊田一秀



たき火は面白い。特に落ち葉たきは最高だ。あの煙の何とも言えない香り、逃げる私を追うように迫ってくる。たき火を始めると、消したくない気持

ちが湧き起<sup>こ</sup>り、ついで遠くまで落ち葉を探しに行くことになる。それは、たき火をしているうちに、火が命を持っているように思えてくるからだ。

たき火にはこつが要るところがよい。まず落ち葉の積み方。初めに骨組みとして小枝を井桁型に少し組み、その上に落ち葉をまぶすようにふわっと積んでいく。形はできる限りとんがり形にする。風向きを考えて、山の両側にそつとトンネルを掘り風穴とする。安全のために水バケツを用意し、トンネルの中の小枝に着火すれば至福の時が始まる。

たき火にはいくつのかの大切なポイントがある。第一に、例え濡れ落ち葉であっても自ら燃えようとする力を内に秘めていることを信じること。第二に、それ故にたき火の火をいたずらにいじらないようにすること。特に初心者は、火の調子が悪いときについこの過ちを犯してしまう。どんなにくすぶついていても、落ち葉は一枚一枚燃え上がる時を待っているものである。白い煙を上げてくすぶつていたものが、少し黄色の煙を出し始めたらしめたものだ。黄色い煙は燃え始めのサインである。第三に、後から落ち葉をたす時も、常に「とんがり形」をこころが

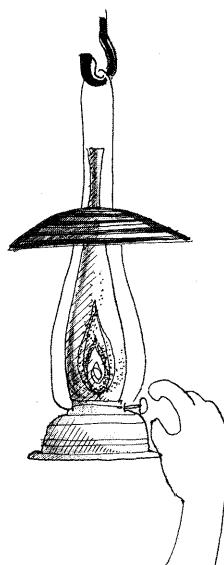
け、上から優しく葉を落とすこと。第四に、もしも、どうしても消えそうな時は、中の小枝を少し足すこと。

いじられずに、ゆっくりと燃え切った落ち葉の灰は白く細やかで美しい。力を全うしたものの悔いのなさを感じる。それに対して、いじられた、たき火の灰は黒く荒い。いかにも燃え残りといった風で未練がましいような、恨みがましいような感じである。

幼稚園でも、山の大銀杏の枝が高い空を差すようになる頃、落ち葉たきをする。まず大きな木を組んで、その上に落ち葉をまぶし、大人の背丈もある大きなとんがり山を作る。周りにバケツを並べ、子どもが近付きすぎないようにライン引きで線を引いた後、いよいよ着火である。火は怒った龍の舌のように天をなめ、火の粉や落ち葉を空高く舞い上げる。子どもたちは、皆、空を指差し歎声を上げる。火は人を集め、人を興奮させる力を持つ。

子ども達はバケツや空箱を携えて、庭の隅々にまで落ち葉を集めに行く。自分たちが苦労して集めた落ち葉が燃え上がる中に、子ども達は自分の「技」を見るのだろう。子ども達それぞの顔に高揚している様子が見てとれる。たき火を中心には園庭中が活気に包まれている感じである。

十一時位になつて火が下火になると、たき火の中にさつまいもを入れて、焼きいもの準備となる。お弁当のあと、うつすらと煙を上げている「おき」の中からおいもを取り出し、園庭にござを出して皆でたべる。一日、たき火に引き寄せられ、いつとき縄文人に戻った彼らは、手にした焼きいもがなぜあつたのか、そしてなぜおいしいのか正確に識つてゐる。そんな子ども達には、おいもの焦げた皮で口のまわりを黒くしている様子がよく似合つてゐる。部屋に戻つて椅子に座ると、どの子も皆同じに煙の良い匂いがしている。



(お茶の水女子大学附属幼稚園)

火方法はたき火の一連の流れの締めくくりとして欠くことのできない儀式でさえあつたといつてもよい程である。

火の消し方は、何と言つても立小便だつた（失礼！）。友達数人でくすぶつてゐるたき火を囲み、一斉に消化する。それまで大切にしてきた火を自分で自身で消す確かさと快感がそこにはあつた。この消

のまわりを黒くしている様子がよく似合っている。  
部屋に戻つて椅子に座ると、どの子も皆同じに煙の  
良い匂いがしている。

冬は家なしにはもつともかなしいときであります。火をたく家さえ持つていれば、だれでも身と心とをやすめることができました。親や年よりが子を愛するということにも、やはりひとつの制限のようなものがあつたのです。夕がた外の風がただんづめたくなるころから、家の中にはあかい火がもえはじめます。母が庭におりてまだいそがしく立ちまわっているあいだ、あぐらのひざの上に子をのせて、小さな手をあたためてやるにも歌がありました。それをだれから学ぶかというと、じぶんが小さなうちに何十ぺんとなく、きかせてもらったのが土台になつてゐるのですから、よっぽど古いものといふことができます。

信州あたりにいまでもおこなわれているのは、

冬は家なしにはもつともかなしいときであります。火をたく家さえ持つていれば、だれでも身と心とをやすめることができます。親や年よりが子を愛するということにも、やはりひとつの制限のようなものがあつたのです。

子どもに手を出させて指と指とのあいだを、おさえていきながらこうとなえるのです。

火い火いたもれ  
火はないないと

あの山越えて

この田へおりて

このくぼつたみにすこじいざる  
または「ここへくりやちよくりりざる」などと  
いって、こそぐつてわらわせるのであります。

柳田国男『火の昔』(昭和18年)

——火をたくたのしみ——より